

ば、ステロイド治療となるが、サイトメガロウイルスの活動性が残存していれば、悪化させる可能性があるため、判断に迷ったが、自然に血小板数、凝固系データは改善を認めたため特別な治療は要しなかった。

症例2も子宮内胎児発育遅延、発育停止にて選択的帝王切開で出生。出生時に出血斑、血小板異常低値が認められ血小板輸血を繰り返した。血清学的検査でサイトメガロウイルス感染症と診断された。退院時に撮影された頭部MRIで孔脳症が認められた。頻度としては非常に希でほとんど報告はない。神経学的には所見ないが今後慎重にフォローアップが必要と考えられる。

## 5 平成14年度の母体搬送・新生児搬送例について

須藤 寛人・岡田 潤幸・菊池 朗  
安田 雅子・安達 茂実・高橋 勇弥\*  
山口 正浩\*・阿部 忠朗\*・金子 忠之\*  
邊見 伸英\*・星名 哲\*・竹内 一夫\*  
沼田 修\*・鳥越 克己\*

長岡赤十字病院産婦人科  
長岡赤十字病院小児科\*

平成14年の当院における周産期統計および母体搬送統計を発表した。

1. 分娩母体数は920例、分娩児数は942例であった。多胎数は21例。
2. 早産数は100例、早産率は10.9%であった。
3. 低出生体重児数は160児、同率は17.1%であった。
4. 母体搬送数は75例であった。このうち35例が24時間以内で分娩となった。
5. 母体搬送の理由は切迫流産・早産が30例と最も多く、ついで前期破水、子宮内胎児発育遅延、多胎であった。妊娠中毒症、羊水過多症、羊水過少症そして前置胎盤の順であった。
6. NICUには院内出生の100人と院外出生49人を取り扱った。
7. 新生児搬送の理由は消化器疾患10例、呼吸器疾患8例、先天異常・染色体異常7例、感染

症6例そのほかであった。

8. 周産期死亡例は10例(同比は10.6)であり、内訳は死産が2例、新生児死亡が8例(全例が重症奇形、染色体異常、心奇形などの症例)であった。

## 6 総排泄腔遺残症の低出生体重児例～胎児期、新生児期の画像所見～

竹内 一夫・鳥越 克己・沼田 修  
星名 哲・邊見 伸英・金子 孝之  
阿部 忠朗・高橋 勇弥・山口 正浩  
広田 雅行\*・内藤万砂文\*・須藤 寛人\*\*  
安達 茂実\*\*・安田 雅子\*\*  
菊池 朗\*\*・岡田 潤幸\*\*

長岡赤十字病院小児科  
長岡赤十字病院小児外科\*  
長岡赤十字病院産婦人科\*\*

妊娠28週より胎児腹水を指摘されていた。28週5日に胎児腹腔穿刺を行い、腹水を245ml採取した。腹水中に多数の扁平上皮と好中球を認めた。その翌日より再度、多量の腹水貯留を認めた。30週4日に胎児腹腔穿刺と臍帯穿刺を行った。腹水中に炎症細胞の出現を認め、扁平上皮は認めなかった。臍帯血ではCRPが10.4mg/dlであった。その後、腹水は認めなかったが腔内の液体貯留と水腎症が出現した。在胎32週、1664gで出生した。総排泄腔遺残症、ファロー四徴症、鎖肛、直腸腔瘻、水腎症、水腔症と診断した。尿中に腔内腔の扁平上皮が混入していることから、胎児期には尿が尿道から排尿されず、腔、子宮、卵管を通過して腹腔へ流出し尿腹水となっていると考えられる。尿に混入した胎便が卵管炎から卵管癒着、腹膜炎を惹起していると考えられる。卵管閉塞により、水腔症、水腎症となると考えられる。

## 7 福島県の新生児外科

大沢 義弘・近藤 公男・渡辺 真実  
太田西ノ内病院小児外科

福島県の人口は約210万人、年間出生数は約2

